あぶのーまる

にゃんきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あぶのーまる

【Ｎコード】
Ｎ６７１８Ｋ

【作者名】
にゃんきち

【あらすじ】
俺はいたって普通の人間です。
そんな自称普通人間の主人公が所属するのは謎の変態集団、まわりは美少女だらけのハーレム状態なのにいまいちとトキメキがないのはどういう訳？
美少女達の隠された裏の顔、覗いてみたくはありませんか？

なんていうか、これが今の俺なんです

はじめに言っておこう、俺はいたってまともな、普通の人間だ。

学校内のとある一室、放課後になると「活動」のため俺はこの場所へとやってくる。

「あ～ん、もういじわるさんなんだからぁ」

ドアを開けるなりそんな甘い声が耳に入ってきた、声の方向に視線をやるとニコニコと笑みを浮かべる一人の女の子が部屋の中央付近、こちらに背を向けているソファーの上にいた。

茶髪にゆるっとした感じのパーマ具合、少し幼さは残るが整った顔立ちで、全体的にほんわかした雰囲気の漂う、『天然系美少女』それが双葉一葉（ふたばいちよう）である。

彼女は俺が部屋に入ったことに気づいてないらしい、特に静かに入ったわけではないのだが、今彼女は別のことに夢中なようだ。

「ほ～ら～、もう逃がさないんだからぁ」

どうやらこちらからは確認できないが、ソファーにはもう一人いるらしい、この甘ったるい声の感じと内容だけを聞いたら、ここをどこなのか知らない人ならきっと少しはドキドキしてしまうのだろう。だが、この場所を知っている俺は全くそんな気分にはならない、少し呆れ気味に自分の入室を知らせるように声をかけ近寄る。

「今度は何の実験だよ？」

ソファーに近づくとそこでようやくもう一人を確認できた。

「た、助けて」

少し涙ぐみながら助けを求める少女、いや、美少女か。黒髪ロング色白で細身な、いかにもって感じの『正統派美少女』赤居葵（あかいあおい）だ。

「ふふふ～手出しは無用ですよ～」

とても楽しそうに言い行為を続行する一葉、必死に拒否する葵。

一葉の手には小さい綿棒のようなものが握られているが、見ただけ

では何がしたいのか全くわからない。
「んで、一体何の実験なんよ？」
再度聞いてみる。
「人は鼻を犯されてオーガズムに達せられるかの実験だよぉ～」
一葉は瞳を輝かせながら生き生きと答えてくれた。毎度毎度この子は見た目に似合わずハードな実験をなさる。人体実験萌え、他人の身体に対して何らかの実験行為を行いその反応で自分を満たす、それが一葉の持つ異常心理。
見た目に似合わず意外と力持ちな一葉は徐々に葵の抵抗を抑え込んでいく、葵はすでに半泣きから本泣きに変わりそうになっていた。が、まあいつも通り確認。
「んで、今日の葵は抵抗しながらもだんだん逆らえないようになり堕ちていく女の子、そんな設定か？」
葵も瞳を輝かせながら（というか涙ですでに輝きまくっていたのだが）満面の笑みを浮かべた。設定萌え、自分自身に何かしらの設定をしてそれを演じきることで喜びをおぼえる、それが葵の異常心理。
そう、俺たちがいるこの部屋は、とある部活動の活動拠点たる部室、部の名称は異常心理研究部、人呼んでアブノーマル部だ。簡単に言えば変態の集まりである。
はじめに言っておいたが、俺はいたって普通の人間だ、一葉や葵のように変態な一面は持ち合わせてはいない……はずなのだが、今現在このアブノーマル部に所属している。一体何がどうなってこんなことになったのやら。
「あ、あ、あ、あひゃひゃ、ふぁひゃひゃひゃひゃ！！」
ああ、どうやら一葉の実験が最終段階に入ったようだ。
「おーっす、やってるかなー？」
勢いよくドアが開きとびきり元気な声が入ってきた。スポーティなショートカットに着崩した制服、サバサバとしたカッコよさで、今年のバレンタイン一番多くチョコを貰ったと噂の『イケメン的美

少女』川野海深（かわのうみ）の入場だ。
「今日もなかなかハードそうだねー」
「ええ、人は鼻を犯されてオーガズムに達せられるか、が実験テーマだそうで」
「そうかそうか、じゃあ私も早速今日の活動を、いつものように頼む！」
　気付いた時には彼女は下着姿になっていた、いつのまに脱いだのやら、隠すまでもなく彼女の異常心理は露出、ただ彼女の場合は自分が満たされるためにはただ脱ぐだけでは足りない。俺はいつも通りにその状態になるように手伝いをする、手足を縛り猿ぐつわをし、どこの教室にも必ずと言っていいほど、常備されている掃除用具のロッカーに彼女を閉じ込めた。密室束縛露出萌え、もう説明することもない、普通に変態だ。
　女の子を押し倒し鼻の穴を犯し歓喜する少女、鼻に綿棒を突っ込まれマジ泣きしながらも恍惚の表情を浮かべる少女、ほぼ裸に近い格好で自由を奪われロッカーに閉じ込められて興奮する少女。そんなカオスな部屋で当たり前のようにくつろいでしまう俺、勘違いされては困るので、念押しでもう一度だけ言っておこう、俺はいたってまともな普通の人間だ。

自己紹介、自己崩壊、カウントダウン開始。

始まりの月、四月。

世の中では、学校も会社も、おまけに季節もここから新しい一年を迎える。

一から数えて十二まで順番にあるのに、なんで一年の始まりは四月なのだろうか？　やはり季節的なものだろうか、一年の始めが寒さも厳しい冬では始まる気がしないからか。気温もぽかぽか、植物たちも芽吹く春がスタートにもっとも適しているからだろうか、それならいっそ四月を一月にすればよかったのに。

俺はそんな頭の悪い考えをしてしまうほど浮足立っていた、それはもうふわふわと音を立てられるほどに。

この春俺はめでたく中学を卒業し、今日入学式を迎えている。中学は家から近いからというだけの理由で学力もそこそこ、規模もそこそこ、部活なんかもたまに活躍する部があるくらいな、なんというかどこにでもあるような普通の中等学校を選び、平々凡々な成績で卒業した。

しかし、高校は自分の行きたいところを選んだ。自宅からはバスで十五分ほどの距離にある、通学に不便とまではいかないが特に近場でもない高校を。

理由はいたってシンプル、俺が選んだ私立皆霧学園（みなぎりがくえん）は、今年新設された高校なのである。

歴史や伝統もなく、入学案内を見る限りでは、かなり自由な校風、それになんといっても上級生がいないというのがかなり魅力的だった。

そんな、理想を現実に再現したかのような高校の、新設初年度に入学できたのはまさしく僥倖（ぎょうこう）だった。タイミング良すぎるぜ、俺！

ここで一生分の運を使い果たしていてもおかしくないような、そのくらいのラッキーだった。まあ、結論から言うと、実際運は使い

果たしていたと思う、なんせ俺はこの入学からたったの二日で、とんでもないことに巻き込まれてしまったのだから。

式が終わり最初のホームルームが行われた、俺がいるのは一年三組の教室。

一年は一組から五組まであり、学力が均等になるように組み分けされている、一組は言うまでもなく進学組、噂によると有名進学校の推薦を断ってまで入学したやつがいるとかいないとか、新設校に進学のメリットなんてあるのだろうか？　噂なのであまり信憑性はないのだが。まあ、俺の学力は中の上くらいなのでこのへんなんだろう。

地元から少し距離もあるせいか、同じ中学出身でこの高校に進学したやつは一人しかいなかった。といっても、そいつとはクラスが一緒になったことは一度もなかったし、話したこともなければ、名前すらも記憶にない。同じ中学だったというだけの人物である。もしここで同じクラスなんかになれば、少しは話したりするのだろうか、なんだか逆に気まずい、でも話さないのもおかしい気がする。別のクラスになっていることを祈ろう。

ホームルーム序盤、担任から簡単な学校内の設備と選択授業やら部活動についての説明がされた、部活に関しては新設校というのもあり、先生方の中に顧問を経験したことのあるものだけが、とりあえずの案として、いくつか挙げられているだけだった。他に部としてやりたい活動があれば、新しく創れるらしいのだが、俺は特に部活動に入る気はなかったので細かいことは聞き流した。

説明が一通り終わり、クラスの自己紹介が始まった、一人ずつ順番に名前、出身中学、趣味や特技などあれば簡単な自己アピールも添えて、といった具合である。一人が終わるたびに担任がいい感じにコメントをしつつ次に回してくれている、新しい学校、新しいクラス、みんなが溶け込みやすいように色々と考えてくれているのだろう、席順にしたって普通は五十音順に並べるだろうに「男女が隣

同士になるようにしたぞ、その方が楽しいだろう？」などと言って、順不同に決められたものだった。男女比が均等じゃなかったらどうするつもりだったのか。発言は親父だが女性だし、多少いい加減ではあるが、担任のクジ運も悪くはなかったようだ。そうしている間に俺の番が来る。

「あ、えと、八方貴哉（やかたたかや）です。出身は桜台中学で、趣味は読書と、あとは、寝ることです」

頬をかきつつ「はは」と笑いながら担任を見ると「八方〜、授業中に居眠りはするなよ〜」などと予想通りの反応を返してくれた。教室にもちらほらと笑いが起きてくれた、少しホッとした、自己紹介の印象は大事だ、ここで変なイメージや、とっつきにくい感じを出してしまうと今後の友達づくりなんかに悪影響が出る。

自己紹介も進んでいき、次は俺の隣の席の子の番になった、良く見るとかなり可愛い子だった。

黒髪ロングヘアーで色白、細身でいかにもって感じの美少女だ。ナイス男女隣同士！

「赤居葵（あかいあおい）です。出身中学は桜台中で、趣味は読書と、寝ることです」

一瞬の沈黙。

おや？　おやおや？　どうやらこのお方は、俺がさっきまで別のクラスになることを望んでいた、同じ中学出身者のようだけど……。こんな可愛い子だったら記憶に残っているはずなんだが？

それに、その自己紹介、俺のと全く同じじゃねーかっ！　そして同じように笑いながら頬をカリカリしてるんじゃねーよ！

「お、おおお、そうか、八方と一緒になって居眠りするんじゃ、ないぞ〜？」

ほら、先生困ってるじゃねーか！　ていうか、なんか周りの視線も痛いよ？　注目されちゃってない？

「はい、寝るときは貴哉君と一緒に寝ます」

おい！　おいおいおいおいおい！　なんで語尾にハートマーク付くような感じで言っちゃってるの？　あれ？　俺って知らない間に

この子とそんな関係でしたっけ？
「う、うおおお……、そうか、赤居は八方とただならぬ関係か、そうか、残念だったな男子諸君、赤居のことは諦めてくれ」
おい？　おいおいおいおい？　男子諸君、俺のことをめっちゃ睨まないで？　先生？　そのまま「はい次ー！」とか進めないで？
「ふふふっ」
彼女――赤居葵は「ちょっと意地悪しちゃった」みたいな感じで俺に笑いかけてきた、正直すごい可愛い。可愛いのだけど、一体全体何が何やら、今この数分間のうちに俺の身に起きたことを、誰か説明してくれないだろうか。
入学初日、不安と期待を胸に膨らませ、友達百人でっきるかな？的な感じで始まったはずの俺の高校生活は、周りを見れば女子は何やらヒソヒソ、男子は親の仇でも見るような視線、隣にはやけに人懐っこい笑みを投げかけてくる美少女という構図に落ち着いた。
落ち着いて欲しくなかった。
ホームルームも終わり、初日の内容はこれで全部終わり、あとは下校するだけとなった。
俺はもう何が何だか分からなくなっていたので、早々に帰ることにした。学校から自宅まではバス一本、乗換えなしで行ける、ちょうど良い時間のバスがあったのでそれに乗り込む。乗客はほとんどいなかったので奥の二人掛けの席に向かう、座ったのと同時くらいにバスは発車した。
「よいしょっと」
「よいしょっと、へへ」
……あれ？　おかしいな、空耳かな？　ちょっと怖かったけど勇気を出して隣を見る。
「やほ、へへへ～」
どえらい美人がそこにいた。
通路を挟んで反対側の、同じく二人掛けの席にちょこんと座る赤居葵の姿がそこにはあった。

「偶然だね」
「あ、ああ」
いや、絶対違うだろう？　怖っ何この女。いや、可愛いからいいんだけど。
「う～ん、隣いい？」
「あ、ああ」
俺のすぐ隣に彼女は移動してきた、バスの座席は広くないのでお互いの体が少し触れあう、少し甘い香りがした。
「入学式緊張したねえ？」
「あ、ああ」
「明日から楽しみだね？」
「『あ、ああ』」
ハモッた！
「あははは、貴哉の真似～、似てた？」
名前呼び捨てになってる！　てか、何この女、超可愛い。ってこら、いかんいかん、このままではいかん、絶対に。
「あ、あのさ赤居、さん？」
「葵」
「へ？」
「葵でいいよ」
「あ、じゃあ葵さん？」
「ん～、違う違う、呼び捨てで」
「え、と、葵」
「うん、そうそう、いい感じ」
やば、超可愛い。……いかん。
「えーとさ、俺たち初対面だよな？　一応確認なんだけど」
「そうだよ？」
「だよね、そうだよねー」
「でも、もう仲良しでしょ？」
ひゃっほーい！　美少女と仲良しー！　……いかん、どうしたん

だ俺、この女といるとなんかおかしくなってる気がする。
「あれ～？　もしかして仲良しだと思ってるの私だけ？」
「あ、いや、ごめんそういうつもりじゃなくて。ほら、俺らってあんまりお互いのこと知らないし」
「あ、なるほど。じゃあ知ってもらえばいいのか、何が知りたい？　スリーサイズ？」
はい！　ぜひ！　……もう死のう。
「いや、それも興味がないわけじゃないんだけど、そういうんじゃなくてさ？」
「……すけべ、スリーサイズ以上って……」
「うお！」
「じょ～だん」
「ちょ、おまっ」
「あはははは～」
いやー、和むね、もうどうでもよくなってきちゃった。入学して一番仲良くなったのが美少女です。これでいいんじゃないかな？　ちょっと変だけど悪い子じゃないし。
「うん、でもわかるよ、貴哉の言ってること。本当の私を知りたいのね？　設定とか抜きにしてってことね？　ちょうど良かったわ、私もそのつもりだったし。実はね、中学の頃からあなたには期待していたわ、はっきり言って目を付けていたの。だって、私と同じ匂いがするんだもの。ふふふ、楽しみだわ～、感じてきちゃった」
あれ？　葵さん？　なんか雰囲気が全然、あれ？　なんか今設定とか言いませんでした？　それに、俺に目を付けてたって、感じてきちゃったとか、どういうことですか？　悪い子、じゃないし、ね？
「葵？」
「なあに～？」
「へ？　あれ？」
「どしたの？　変な顔して、それよりさ今日本当にいいの？」
「今日？　何が？」

「もう〜、さっき約束したでしょ？　この後私の家に来るって」
「あ、ああ」
「ほんと？　やた〜！」
あれー？　そんな話出てきたっけ？　なんかもう危ない予感しかしないんですけど、大丈夫か俺？

そんなこんなで、いろんな危険を感じつつ、赤居葵の自宅へ行く約束をしてしまった俺。バス下車まで残り三分、その短い間で約束を断れるような理由は見つかるはずもなく。いろんな危険へのカウントダウンは止まることなく動き始めてしまった。

自己紹介、自己崩壊、カウントダウン開始。（後書き）

どうも～にゃんきちです。
このたびは、読んでくださってありがとうございます。
さて、今回のお話ですが、実は制作上の都合により予定していたものより短くなってしまいました。すいません。すこし読み足りないと感じるかもしれませんが、その辺は生温かい目で見てあげてくれると、うれしいです。
次回は早めに投稿できるようがんばります！
うふふ、な展開が来る！　はずです！　乞うご期待！（あ、あんまり期待しないでください）
感想などもあれば是非お願いします～。
では、次回もよろしくお願いします！！

大変な変態は、変態で大変なんです

「はじめに言っておくけれど、私は変態よ！」
衝撃的だった、ものすごい衝撃があった。もう、前回までのあらすじとか、そういうものを吹っ飛ばしてしまうほどの威力。
彼女――赤居葵の部屋に招かれ、最初に彼女の口から発せられた言葉がこれである。
まあ、ただならぬ予感はしていたのだが、この発想はなかった。
俺の高校生活は幕を開けたとたんに、分岐のない茨の道が目の前に伸びてしまった。平和で楽しい充実した高校生活を取り戻すためにはこのイベントは回避不能だ。
赤居家訪問、ストーリー序盤に魔王の城に攻め込むようなものだなと、そう思っていた。
実のところ俺自身、女の子の家に遊びに行くなんて行為が経験したことのないものであり、しかも親が不在で二人きり、おまけに美少女。俺の煮えたぎるマグマのような下心……もとい緊張感は限界ラインギリギリの位置にあった。
あったのだが、しかし、そのあまりの衝撃に全部吹っ飛ばされた。一周回ってビックリするくらい冷静になれた。
「そうか、変態さんか。俺はいたってノーマルな人間なんだが、はたしてそんな俺に君の友人が務まるだろうか？」
「もちろんよ、大丈夫安心して、あなたも素質十分だから」
ものすっげえ笑顔で言われちゃった。ダメだこいつ、早くなんとかしないと。それに、話の内容的に場所も早く変えたい。
「あのさ、葵？」
「な～に？」
「その、とりあえず入らないか？　家に」
そう、ここはまだ外なのである。自宅の玄関前で自分が変態だと自信気にカミングアウトする美少女、どうよこれ？　俺的にはアリ

なんだけど、世間的にどうよ？　住宅街のど真ん中だし、俺の家ともそう離れてはいないし、知り合いとかに遭遇する前に入ってしまいたいんだが。
「あ～、ごめんなさい。そうだよね、でもほら、いきなり変態の私に遭遇しちゃうと色々と大変でしょ？　だから一応、設定解除される前に言っておこうと思って」
　設定解除って何のことなのかな？　それに家に入ると変態な私がいらっしゃるらしいけど、俺の身は大丈夫なのかな？　色々不安だ。
葵は扉を開けて「どうぞ～」と可愛らしい笑みを投げかけてくれる。くそっ、この笑顔に逆らえるわけがない。
「……おじゃましまぁ～す」
　恐る恐る、家の中へと踏み入る。そこはもう、彼女のテリトリー、聞いていた通り家族の方は留守のようだ。今日の会話から察するに葵はおそらく、学校では何らかの猫をかぶっており、自宅に帰るとその猫を解除すると、ちょっとした二重人格みたいなものだろうか、俺にずっと目を付けていたとかいないとか、そんな発言もしていた気がする。危険な香りしかしてこないのだが、今ならまだ間に合うか、急に用事を思い出したとかなんとか言って全力疾走すれば逃げられるのでは？　よしっ！
　ガチャリ！
……背後からなんか嫌な音がしませんでしたか？
　ガチャリ！　ガチャリ！
　三重ロックですと～～～～～～～～～！！
　セキュリティは万全！　これで安心だね！
「って、んな訳あるか！」
「へ？」
「あ、いや、なんでもない、気にしないで」
「そ？　私はちょっとお部屋を片付けて着替えを済ませるので、貴哉は居間で少しくつろいで待ってて」
　葵はそう言うと俺を居間へ案内して自室へと向かった。

少し落ち着いて考えよう、このまま部屋にお招きされて密室に二人きりになんてなったらどうなるかわかったもんじゃない。さっきの感じだと葵の様子自体はあまり変化がなかったように見えた、設定解除って何がどう解除なんだろうか、少し前に俺の頭をよぎった考えだと二重人格みたいなもの、になるがそれなら設定と呼ぶのはおかしい、ようなそうでもないような？　つまるところ実際に見てみなければこれについては何とも言えないだろう、設定なんて状況と合わせて変わっていくもんだろう？　どっちかって言うと、その、イ、イメプレみたいな？　そんなことなのかな？

「イ、イメプレ……イメプレか……」

考えれば考えるほど危険な予感しかしてこない。

もうこれは出たとこ勝負だと腹をくくろう、なんていうか、俺にデメリットはない！！　そんな気がする！

てのは冗談だ、とりあえず基本的には逃げる避けるの態勢で行こう、平和な高校生活を取り戻すためには、葵の説得が最重要課題だ。

「たーかーやー、上がってきてー」

そうこうしているうちに魔王様からお呼び出しだ。

彼女の部屋は二階にある、階段を上がってすぐの部屋のようだ、開けた扉からいたずらっ子のように顔だけ覗かせてこちらに笑いかけている。正直たまりません。

「はーやーくー」

せかされるままに階段を上がっていく、葵の私服がどんなものか少し気になりはしたが、それよりも部屋の中がどうなっているかが不安でそれどころではなかった、拷問部屋みたいになってたらどうしよう。

「お、おじゃましまーす」

意外だった、と言ったら失礼な話だが（というか俺の予想がアホすぎるのか）、白を基調にしてあちこちの小物やらは淡いピンクのものが、というなんとも女の子だなって部屋だ。少し安心した。

「いらっしゃ～い」

パタン、ガチャリ！
「！」
その音は！　さすがにあわてて振り返った。
「すごいでしょ私の部屋」
葵は、あるものを俺の目の前にぶら下げてそう言った。
「か、ぎ？」
「そう、この部屋の鍵」
そう、よくある普通の鍵だ、そしてそれはこの部屋の鍵、ドアノブに目をやるとそこには予想できた限りでは、一番最悪のものがあった。鍵穴、普通それは扉の外側にあるものだが、この部屋はそれが内側についている。
「葵、お前一体何をぼっふぇうぇいあぁぁぁっ！！」
失礼。取り乱してしまった、しかしこれを見たら誰だってこうなるに決まっている。
「葵、なんて格好を……」
目の前の葵は、生まれたての姿にバスタオル一枚というとんでもない破壊力を持った格好をしていた。
「どう？　興奮した？」
しました。
「そんなこと言ってないで服着ろよ！」
さすがに直視できないので慌てて背を向ける。
「ええ～せっかく頑張ったんだけどな、でもこの鍵は欲しくないの？　これないと帰れないよ？」
「じゃあくれ」
「ダメ」
「なんでだよっ！」
「来たばかりなのに、もう帰るの？」
「わかった、まだ帰らないから鍵だけ渡しておいてくれ、それと服も着てくれ」
「二つも貴哉のお願い聞くの？　う～ん、どっちか一つだけなら聞

いてあげる」
「え、一つだけ？」
「そう、一つだけ」
くそ～、なんか完全に遊ばれている気がする、でもあんまり嫌じゃないって感じてる俺もいる、だめだ完全に葵の思うつぼじゃないか。なんとかしなくちゃだけど、ここはとりあえず。
「じゃあ、服着てくれ」
「おお～、貴哉は生着替えをご所望か～」
「ご所望してねぇよ！」
「だって、鍵は渡せないからそうなるでしょ？」
うお、そうかそうなるのか、てっきり俺は着替えが終わるまで部屋の外で待つつもりだったが、もしかしてこの女、
「葵お前、はじめから俺がそっち選ぶと思ってやっただろ？」
「どうでしょ～？」
やっぱりか。この女には勝てる気がしない、こうなったら気のすむまで相手して、さっさと満足してもらって解放されるのを待つ方が利口か。
「俺、このままこっち向いてるから、さっさと着替えてくれ」
「はいはぁ～い、こっち見てもいいからね？」
そこは普通「こっち見ちゃダメだぞ」だろ、先が思いやられる。パサっとバスタオルが床に落ちる音に少しドキドキしてしまった、まったく入学早々なんでこんなことになったのか、学校でこんなことされたらたまったもんじゃないぞ？　まさか、ないとは思うが、怖いから先に確認しておいた方がいいだろう。それに今回はたまたま俺だけど、これから先はどうなんだろうか？　先生やクラスの奴らから俺と葵は【ただならぬ関係】として、二人でワンセットと見られてしまっただろうから、この先葵が学校でこの変態を全開にして、しかもその相手が他の誰かだったら、俺の身まで危ない、俺がそう仕向けたみたいに見られたりでもしたら被害は甚大だ。俺の明るい高校生活を守らなくては、なにかいい方法はないだろうか、俺

と葵がワンセットに見られるのはもう諦めたとして、これ以上の事態にならない打開策を用意しないと、葵の変態っぷりを隠せて、被害が俺だけにとどまりそうで、万が一何か起きても上手くごまかせるような隠れ蓑的な、そうなると教室以外ではないどこかでひっそりと活動を？　なんだそれ？　あ、いや待てよ、あるにはあるか、一つだけ。我ながら名案だ、よし後は葵を上手く説得して了解を得よう。

「なぁ葵、聞いてくれっぽっひゃっはっはっひゃふ～ん」

拝啓、赤居葵様、あなたはなぜまだ何も着ていないのでしょう？　割と結構な時間がたっていたはずなのですが。確かに、大丈夫だろうと振り向いてしまった俺にも悪いところはありました、でもなぜですか？　なぜあなたは一糸纏わぬ姿でM字開脚などしておられたのですか？　さすがに俺もノックアウトです、おかげで人間って本当に鼻血を吹きだすことがあるのだと、知ることができました、今度直接お礼を言わせてください、それではまたお会いしましょう。

敬具

「ん、うう」

「あ、気がついた？」

「葵？」

どうやら俺は気を失っていたらしい、裸を見て鼻血を噴出して気を失うなんて、俺の方がよっぽど変態じゃないか。

「貴哉よ、私の裸体はそんなにも興奮したか？」

「……ああ」

「いや、そこは真面目に答えないで、さすがに恥ずかしいよ、できれば忘れて欲しいくらいだし」

一気に赤面する葵、なんか可愛いな。

「そういえば、なんであんな格好してたんだよ、まさか俺が覗くのを待ってたのか？」

「いや～、最初はそうだったんだけど、なんか貴哉頭抱えて唸って

たし、もういいかなって思って靴下でも履こうと思ったらちょうど貴哉がこっち見たんだよ」
「まず、聞いていいか？　なんで靴下から履いた」
「……その方がエロいから？」
「そうか、もう何も聞くまい」
だめだ、やはりなんとかしないと。
「そういや貴哉、なんで唸ってたの？」
「ああ、そうそう。これから先のことをちょっとな」
「先？」
「うん、唐突だけど葵、俺と一緒に部活やらないか？」
部活、それが俺の行きついた答え。これならば上手くいけば部室も手に入るし、葵の全力を隠すこともできるはずだ。
「部活、いいね！　でもなんで急に部活？」
「ほら、せっかく仲良くなれたわけだし、新しい学校だし、俺らもなんか新しいこと始めたらいいんじゃないかなぁ～？　って」
学校で変態パワーを発散できなくて、いつかそのたまりにたまったパワーをみんなのいる前で解放されたら困るからな、そうならないように部活という隠れ蓑を使って少しずつ発散してもらおうってわけだ。
「なるほど、よし、やろう！　んで、何をする部活なの？」
「それはまだ決めていない、これから二人で色々考えて、近いうちに申請を出そう」
「わかった、なんか楽しみだ」
よし、案外うまく乗ってくれた。あとは、いかにしてこの部屋を脱出するかだ。
「う～んもうこんな時間かぁ、貴哉が興奮しすぎて気絶しちゃうからだぞ」
「ごめんごめん」
「せっかく今日は貴哉に私の変態性を説明しようと思ってたのに」
「え？」

いや、それはもう十分に見せてもらったんですけど。
「仕方ないから、色々はしょって説明しよう」
「いや、葵。割ともう説明が要らないくらい見たから大丈夫だと思うよ？」
「え？　全然だよ、貴哉が実際見たのなんて自己紹介とバスの中でのことでしょ？」
「へ？」
良く分からなくなってきたぞ、俺が今説明されようとしているのは葵の中の変態な部分だよな？　さっきの露出魔的な部分のことだよね？
「あ～、そうか貴哉勘違いしてるよ、今この部屋にいる私は素の状態の私だよ。さっきのあれは事故みたいなもので、あ～ゆ～ことで満たされたいわけじゃないの、貴哉が思っている逆だよ、学校での私が全力の私の変態部分だよ」
「……うう？」
「つまり、私は設定萌えなの。何か条件とか色々決めて、それになりきっているっていうのがたまらなくイイの。ちなみに今は、貴哉のことが大好きな天然の幼馴染的女の子って設定だよ、あ、設定抜きにしても私は貴哉のこと好きだから安心して、それでね私の場合どうしても協力者が必要なの、いなくてもいいんだけど、いる方がより快感がね？　だから貴哉に協力してもらう以上は、ちゃんと私のこの変態性をわかってもらおうと思って今日は来てもらったの」
「そ、そうだったんだ」
この子今さらっと俺のこと好きって言いませんでした？　もう良く分からなくなってきたな、学校での葵が変態全力なんだとしたら、部活創る意味なかったんじゃ？　取り消せないかな？
「あのさ、葵のことはわかったよ、とりあえずは協力するよ。しなくても巻き込まれそうだしね、それとさっき話した部活の事なんだけど……」
「そうそう、部活部活、さすがだね貴哉は、私も実は何かもっと興

奮できるような素敵な案はないかと思ってたんだ、部活かぁ～夢が膨らむね、あんなプレイやこんなプレイも、ふふふふふ」

どうやら俺はとんでもなく余計な提案をしてしまったらしい。

結局この日は特に活動内容（表向きの）なんかも決まらないままだったが、すんなり帰らせてくれた。俺の高校生活はかなりアヤシイ方向性のまま走り始めてしまったようだ、平和で明るい高校生活は遠のいてしまったが、退屈はしないで済みそうだ。

せめて明日一日くらいは平和であることを祈って、今日は早めに寝ることにしよう。

大変な変態は、変態で大変なんです（後書き）

どうも、にゃんきちです。
あぶのーまる第三話いかがでしたか？
ですよね、だめですよね、投稿も延びてしまいましたしね、その割に中身は雑ですしね。でも負けません、次こそは面白いものを書きます！　がんばります！　たぶん……。
よければ次回も、生温かい目で見てあげてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6718k/

あぶのーまる

2010年10月12日00時14分発行